総合討論

モデレーター：弘末雅士（立教大学）

上田：それでは、それぞれ思っているところ、あるいは足りなかったことをぜひ展開していただければと思います。それではモデレーターとして弘末先生、お願いします。

弘末：総合討論の進行役をさせていただきます弘末でございます。

前提としまして、中国史の専門でない人間には、景徳鎮や竜泉から積出港に陶磁器を運搬するために、どういう商業的なネットワークが組織されて、どういう商品が入ったのかがいまひとつよく分かりませんので、その点も含めてお話を頂けますでしょうか。よろしくお願いいたします。

金沢：積出港につきましては、景徳鎮は、基本的には広東に出すのでなければ、長江の方をぐるっと回って浙江省の方に出て来る。それが集積されて、おそらく沿海地方の有力者ないし海商が集めて、それを外から来る商人に販売するという形態だろうと思います。それから、沿海地方産の陶磁器はそれこそそれぞれの港町に、幾つかの拠点があるところに出して来る。また福建などの内陸の窯からも河運の便で海岸に出て来て、それを海船に載せて行くということになると思います。

かつて、時代の差はあるんですけど、少し前の時代の沈没船を見ていますと、川などから沿海地方に商品を出して来るときは一つの窯場のものだけを載せる。例えば磁州窯なら磁州窯のものばかり載せた船が沈んでおります。それは引き上げてみると、平底の川船、あるいは沿海用の船。ところが泉州で沈んでいたり、韓国の新安沖で沈んでいたりしたものを見ると、混載をしています。景徳鎮のものがあるかと思えば、青磁をたくさん積んでいて、時代が下がれば、さまざまな福建省のものを積んでいてというようなことで、海船、底の三角の海船で出すときには混載をして出す。その積み替え拠点が沿海地方にあったんだろうというふうに想像しますけど、まだこれも十分には勉強し切れてないということでございます。

弘末：ありがとうございました。そうしますと、宮田さんの議論とも重なるのですが、マカオから景徳鎮の陶磁器が積み出されて行く場合、これはいったん長江や沿岸部まで出してきたものを、船でマカオまで積み出したと考えるのが妥当でしょうか。あるいは内陸部からも積み出された可能性があるのでしょうか。

金沢：可能性はもちろん陸路経由のものはあると思うんですけど、先だって東洋陶磁学会で備前に行きましたが、備前の窯場も港からは何キロか奥にありましたが、ものすごい大甕を最初は担いで港まで出したようです。越前なども三国の港に出るのに、明治ぐらいまで大甕を担ぐ職人さんがいたということです。必ずしもそういうことが不可能ではないだろうとは思いますが、大量に外洋に出して行くようなことになりますと、例えば上海出土の、今は陸地になってしまっていますけれども、上海の沖を回ろうとして沈没した、そういったような船ですと、束ねた状態の碗皿がわーっと載っています。そういうような形態で出して行くとなると、陸路はちょっと難しいかなというふうな印象を持っております。

弘末：ありがとうございました。宮田さん、それについて、スペイン語史料やポルトガル語史料から付け加えられたいことはありませんか。

宮田：積み出しの方では特にスペイン語史料、ポルトガル史料では記載はないんですけれども、逆にアカプルコに大量に着いたものをどうするかというと、陸路で運ぶ。人、もしくはロバを使って運ぶっていうことをやっていたので、陸路も不可能ではなかったのではないかなという気がします。

ただ、中国人のやり方は非常に効率的ですので、船できちんと混載をするような形で、船で持ってきた可能性が最も高いのではないかというのは一致しております。

弘末：ありがとうございました。それでは、次の論点に入らせていただきます。ご報告いただきました何名かの皆さまから、遷海令の話題が出てまいりました。これはフロアの方でも、上田先生にできたら議論に加わっていただきたいのですが、遷海令があまり意味がなかったのではないか。これは坂井先生のご指摘だったわけですけれども、今日のお話、鄭氏の活動のお話等も含めまして、この遷海令の意義、どれだけ効果があったのだろうか。あるいはかえって清朝自身がこたえたんじゃないだろうかとか、いろいろなことが考えられるかと思います。これについて、陶器の問題も含めまして、坂井先生、それから久礼さん、よろしければ上田先生もご意見を頂けませんでしょうか。まず坂井先生、お願いいたします。

坂井：それは今日発表したとおりです。基本的には全部で二十数年間の期間に本当に完全に沿岸地域の人たちが内陸にやられて全く貿易を閉ざしたということなら、その時期のものは絶対外へは出ないはずです。しかし報告しましたように、バンテンにはその時期の陶磁器がかなり多く運ばれています。

それをどう考えるかですが、三藩の乱の時期に一番可能性があると思います。あのときの福建王というのは態度がふらふらしていたようで、鄭氏に付いたと思うと、すぐまた清朝側に戻ったりしています。そのため必ずしも鄭氏と同じ歩調を取っていたわけではないですが、鄭氏がこの時期に厦門・金門を確保したことは間違いないです。そのため、そこへ景徳鎮から何らかのルートで運ばれる可能性は十分あったと思います。

今日報告はしませんでしたが、イギリス東インド会社は東南アジアではバンテンに本拠があり、それが鄭氏と協定を結んでゼーランディア（安平）に支店をつくっています。さらにその出張所が厦門に一時期つくられたようです。そしてインドのマドラスから厦門宛ての東インド会社文書が残っていて、厦門で陶磁器を集めろと書いてありました。

そのため、1679年か80年の時点で厦門が陶磁器を集める拠点であったことになります。それがどこの陶磁器とは書いてないですが、当然、中国陶磁が含まれておかしくないと思います。もちろんその頃の唐船は厦門と長崎も繋いでいるので、日本の陶磁器も厦門へ運ばれることは十分あったはずです。それらを考えた場合、鄭氏が降伏するまで中国の貿易が完全に閉ざれていたとは考えにくいと思います。それらを考慮すれば実態的としては1660年代はともかくとして、70年代にはかなりそのような貿易がなされていたのではないかという感じがします。

弘末：ありがとうございます。それでは、久礼さん、他の運んだものも含めて、鄭氏が運んできたものについて補足していただけませんでしょうか。

久礼：今回、表で出したところでは、磁器もある程度ありましたが、特に銅が1668年から1678年までという極めて短い期間に大量に輸出されています。1671年は最大で、4,480レイクスダールデルだったくらいですから、大体1万ギルダーぐらいの額で出ています。その銅が来たのは、明らかに日本からです。

1670年代前後にはもう既にマカオ周辺で密貿易がされていたという状況ですので、恐らく鄭氏が日本からそのような形で持っていった。それ以前の段階で、バタヴィアなどに鄭氏と関係を持っている華人がいたでしょうから、マカオを経由したルートで恐らく現地に入ってきたのではないかと思います。陶磁器もありますし、非常に顕著なのは銅。これがこの非常に短い時期にだけ出てきますので、そこは何かしらの関係があるのではないか、という考えを持っています。

弘末：ありがとうございました。上田先生、何かこの問題について、おっしゃりたいことはありませんか。

上田：私自身は遷海令についての具体的な検討はしていないのですが、やはり遷海令が始まった当初は福建がメインで、そこでは内陸へ15kmぐらい、かなり厳密に移住させていました。このことは福建で農村調査をしたときに、内陸に移った時期があったと伝承している、あるいは族譜などに書かれているものがありましたので、あったというふうに思います。

一方で、広東、マカオというようなルートで、ポルトガル人に対して、なかなか清朝の方も厳密にできずに少し大目に見る、あるいは手出しできないというようなところが多分あって、これが一つの抜け道となっていた。沿海地域全域というのが清朝の方針ではありますが、やはり厳しいところと抜けているところがまだらになっていた可能性が確かにあるのだなということが分かりました。

先ほどの景徳鎮のルートですけれども、例えば南のマカオの方などへ運び出すとすると、江西省から河川のルートを使って南の方に下るルートがあります。全くの思いつきで、史料的な裏付けはありませんけれども、河川交通で広東の方に運び出して珠江から何らかの形で積み出して、マカオ経由というルートはもしかしたら考え得るかなと思います。景徳鎮、江西省から広東方面への積み出しというのは、かなり時代的にも一つのルートとして確立していました。特にあそこはお茶の積み出し、お茶の生産地というのもありまして、そこでも恐らくそのルートを使って広東の方に運び出してったということはいえます。江西省から南の方へ河川を伝わって、陶磁器等も運び出しているルートがあって、それがマカオ経由で、今日のお話で東南アジアなどへと展開していくというのは十分考え得ると思います。

大清康熙年製という銘が入った陶磁器が各地から出てくるというのは、一つの驚きでありました。実物で証明できたということがありますから、非常に驚きでありました。

弘末：ありがとうございました。同じ頃、マカオから運ばれた可能性が大であったというお話でしたが、この点については宮田さん、いかが思いますか。

宮田：私は結果論から見て、実際、出土していない状況から話をしたので、根元をどう解釈するのか、その出口、最初の出先ですよね、出発点、スタート点がどうだったのかっていうのは、ちょっと私も今後考えなきゃいけないなと今日の話を聞いて思いました。

ただ一つ言えるのは、交易自体の活動自体が鈍っていたっていう感じは、文献を通して見えることは、例えば船の数が減っている、毎年2隻3隻来ているものが1隻になっているっていう現象は起きているんですね。なので、確かに鈍っていることは鈍っているんですけど、ただ先ほどもあったように台湾を通じてとか、久礼さんのお話のとおり、マカオは支配しきれなかった部分もあるという話もあったと。

多分、流通はしていたと思うんですけれども、確かに多少、交易量は落ちていたのでは

ないかなという気は、その結果論から見て、到着点から見た上でいえることかと思います。

坂井：私自身はガレオン貿易の経緯はよく知らないですが、最近マニラの17世紀後半の貿易記録の中で、かなり陶磁器が見られるという報告を聞いています。

そしてそれと合わせたように、全体量がどれくらいかは問題ありますが、17世紀中葉から後半の時期にかけて、中国陶磁は別にして、日本の肥前陶磁が中米を中心に発見されています。メキシコから南へ下がり、あるいはキューバに至る地域での発見例が非常に増えています。そのため絶対量がその段階の中国陶磁に匹敵するかは検討課題ですが、肥前陶磁が置き換わった可能性もあるでしょう。そういう研究が、今進んでいます。

弘末：貴重なお話を頂きました。宮田さん、何か思われることはありませんか。

宮田：肥前地域の流通については、確かに野上さんが詳しくされていらっしゃいまして、私自身もセビリアで数点、日本人が住んでいたといわれるコリア地区の遺跡を調査した際に、肥前磁器を何点か出土しているのを見つけたことはあります。ですので、確かに入れ替わっている可能性は否定できないということですね。

弘末：ありがとうございました。まず前半でいろいろ議論をさせていただきましたのは、いわゆる陶磁器が運ばれる際に、どういう商業ネットワークにのっとっていくかということでありました。こういった点につきまして、フロアの方から何かご質問はありませんでしょうか。

フロアＡ：いろいろ興味深い発表をありがとうございました。

私も文献からやっているので、考古学の方とはピントがずれるような質問になってしまうかもしれないのですが、久礼先生の発表のときに、マカオは台湾鄭氏と東南アジアをつなぐ重要な意味があったということなので、私自身としましては、マカオというよりもポルトガル人との関係の方が気になる印象があります。

というのは、私はカンボジアとかタイをやっていて、こちらの発表でも少し言及がありましたけれども、ポルトガル人と特にベトナム中部にあった広南阮氏政権とマカオとの三者間の関係というのが、この時期の交易や軍事的協力とかを含めて、非常に親密なものがあります。例えば、1630年代にカンボジアにオランダ人が来たときに、ポルトガル人がカンボジアの米を広南にかなり輸出していると。こちらも米がほしいのに、これではまずいから何とかしなくてはいけない、というような記事などがありまして、かなりポルトガル人が活動している。そのポルトガル人が広南を通じてマカオに米やその他の産品を運ぶという流れができている。そう考えると、台湾鄭氏がマカオに行って、マカオからさらに東南アジアの各地に出ていくことになったときに、マカオでの密貿易とか何とかというよりも、ましてやこの辺の海域ではそれこそ金沢先生が言われたようにポルトガル人がかなり入ってきていますし、そこにオランダが入ってくるとオランダとまた対立をすることがある中で、台湾鄭氏を中心とした華人とポルトガル人の関係は、もう少しいろいろ考えるべき問題があるのかなというようなことで感じます。その辺について、特に久礼先生の方と関係することになるのですけども、ポルトガル人と台湾鄭氏の関係であるとか、ものの流れというものに関して、何かあれば、ちょっとお伺いしたいと思います。以上です

久礼：史料上では、先行研究でいろいろ言われているマカオ以外を見ると、今回見たジャ

ワ北岸やバンテンで直接に鄭氏がポルトガル人と接触したという記事は見えてきません。ただ、マカッサルにはバンテンから結構行っています。もちろんジャワ北岸地域からも、マカッサルにかなり行っています。そういったことから、マカッサル経由での接触があったと思います。

もう一つ、広南経由で接触することもあったのではないかと思います。今回は出せなかったのですが、ジャワ北岸地域などから砂糖をバタヴィアに輸出し、さらにバタヴィアから出す際の輸出先として、広南が出てきます。こうした広南への輸出に、オランダ東インド会社は一切手を出していません。他のところは、例えば会社の船の〇〇号が持って行ったと記録されています。しかし広南の場合は、オランダ東インド会社ではない現地の勢力、恐らく華人が中心だったと思うのですが、オランダ東インド会社以外の勢力が決して少なくない額の砂糖を持って行ったことが、史料から明らかになっています。

実はこの時期、砂糖についてバタヴィアからの主要な輸出先はペルシャだったのですが、一時期、広南にはペルシャを上回る勢いで砂糖が輸出されていました。その行った先の広南で、何らかの形で接触しているという可能性はあります。バンテンやジャワ北岸地域で直接という形ではないですが、鄭氏の華人が行った先でポルトガル人と接触をしていることは、十分あり得るということは考えています。

弘末：ありがとうございます。坂井先生、バンテンの事例では、この問題いかがでしょうか。

坂井：直接、今のお話と関わりは少ないですが、マカッサルというのは重要な拠点だと思います。というのは、バンテンの内乱のときにもっとも激しくオランダと戦うのは実はマカッサル人です。シェフ・ユスフというマカッサルの貴族がリーダーで、彼はティルタヤサ大スルタンの娘婿になっています。そして大スルタンがオランダに降伏した後も戦い続けています。彼がバンテンに住み着いたのはもっと前で、1660年代頃にメッカから帰ってきたときにバンテンに来たようです。

そのようなつながりを考えると、これはポルトガルとの話でないですが、ジャワ島の北岸で船を造るという話がさっきありました。もしかしたらブギス人なのかもしれない、という感じを私は受けました。華人が造るジャンクより自然なのは、あちこち他の地点へ動いて造船をしているマカッサル人と同族のブギス人の帆船ピニシです（**図１**）。現在でもバンテンではブギス人の集落がありますが、移住した先で彼らはピニシ船を造ります（**図２**）。そのため彼らの自然の生活の中で、ピニシ船を造ったのかもしれません。

図１　ピニシ船の模型／マカッサル空港、坂井撮影

図２　バンテンのブギス人造船集落／坂井撮影

マカッサル自体には1670年にオランダが勝利するまでは、ポルトガル人がいました。そのマカッサルから北に向かえば、マカオに至ります。どのように鄭氏がマカオと関係してきたかは、マカオ発見の肥前陶磁を除くと物的証拠からはあまり直接的なことは言いにくいです。ただ、もともと鄭芝龍自身が最初マカオに行っていたと聞いています。

そこで本当かうそか、カトリック教徒になったようです。そのため鄭氏自体は決してマカオとの付き合いが昨日今日に始まってないと言えます。そのような流れを見た場合、深遠な関係がずっと続いていたと考えてもおかしくないでしょう。

今の中部ベトナムのクアンナム・グエン氏政権の場合も、オランダとの繋がりが薄いというお話でしたが、最後に鄭氏が降伏した後に、何人かの鄭氏系の将軍たちが亡命しています。そのうちの2～3の将軍たちは、グエン氏によって屯田兵のような扱いで、今のベトナムの南部に入植させられています。ホーチミン市の隣にある華人町として知られるビエンホアとか、あるいはメコンデルタのミトーなどは、当時弱まっていたカンボジア領でしたが、そこに武装華人集団として入植させられています。本領では危ないということで、そちらに向かわされたようです。それが後の華人社会形成につながっています。

他に有名な例がハティエンで、カンボジアとの現在の境界のこの港町に、華人政権ができるのが同じ17世紀末です。これは広東系なので鄭氏との直接関係ではないようですが、そのような華人武装集団の特にベトナム地域への動きが、鄭氏政権の滅亡後に顕著に現れます。武装していない移民の大規模な増加も、この頃の政治状況と大きく関係していると思います。そのような状況証拠から、この時期のポルトガルと、バンテン・マカッサルそして鄭氏は太い繋がりがある感じがします。そのようなことを物的証拠から確認したいと思っています。

弘末：ありがとうございました。貴重なお話でした。鄭氏、それからポルトガル人、ともに本拠地を追われてからディアスポラ化することは、東南アジアのいろいろな場所で見られます。これについて宮田さん、何か感じることはありませんか。17世紀の終わり近くになると、ポルトガル人勢力は衰退したのじゃないかというお話でしたが。

宮田：衰退というよりは、生き残りをかけた最後の活動を。衰退はしていっているんですけれども、生き残り続けて、アジアでは存続し続けていたというのは確かなことで、19世紀になりますと、今度は陶磁器やら、香辛料やらっていうものを扱っていたポルトガル人が、今度はアヘンをインドから輸入する商人っていうのが出てくるんですね。

そういったものを変え、いろんな手段を使って、衰退というよりも生き残りをかけたいろんな商戦を繰り広げていって、それがイギリスと対抗したりとか、いろんなところでいろんな人と衝突しながらも生き残り続けたというところがポルトガル、マカオのポルトガル人の一つの在り方なんじゃないかなとは思います。

弘末：ありがとうございました。それじゃあ、時間が押してきましたので、二番目の陶磁器を威信財として使い、また実用品としても使い、そうしながら新たな地域文化あるいは文化社会を形成していく、そういう側面の方の話に入らせていただきたいと思います。まず伊川先生、たくさんのルソン壺を導入したことにより、日本の文化社会は、どういう展開を遂げたと考えたらいいのでしょうか。

伊川：そうですね。これはもう常識的に出てくる答えを超えるものはなかなか出せないと思いますけれども、一つにはやはり茶葉の保存というのは、ルソン壺に関しては非常に大きいようです。秀吉の頃に限らなくても、室町時代の茶道史の流れの中でも、まずお茶壺といわれるものが出てきたことで、お茶にもちろん茶葉は必須ですので、そういうものの

保存に与えた影響がまず指摘はできると思います。

もう一つは、やはりルソン壺自体の価格もあのような形で組屋文書ですね、六つだったかな、134両で売れたというような記録もありますけども、非常に高価になっているものです。

それよりも一般的に言われるのは、茶入れというやはりお茶をたてるときに、濃い茶を入れるもう少し小さい容器があるわけですけれども、あれは非常に高値になったということもいわれていますが、いずれにしてもそういうものも含めて、よくいわれるとおり、社交のスタイルがあの時期にできてきたということはいえると思います。

比較的常識的な発想を少し細かく申し上げたに過ぎない感じにはなるのですけれども、その時点ではあるのではないかというふうに思います。

弘末：ありがとうございます。このテーマにつきまして、宮田さんが中国陶磁器が入ってくることによって、宗教とかいろいろな領域で、新たな展開が見られ、新たな文化形成することを指摘されました。その点についてちょっと言及をしていただけますでしょうか。

宮田：ヌエバ・エスパーニャでも中国陶磁器というのはやはり富裕層がまず第一に受け入れて、そしてその中には宗教、キリスト教関係者が含まれていて、やはり威信財として残されているものもいまだにたくさんあります。貴族はもちろんいないんですけれども、富裕層の中には自分たちの名前を入れて残したりとか、いろんな金属を、装飾して、家の中に飾っていたりとか、メキシコにはカサ・デ・リスコという場所がございまして、そこは家の壁じゅう、中国陶磁器を貼り付けているという場所があるので、そういった意味でやはり威信財としてもヌエバ・エスパーニャにしっかり根付いていたのではないかと思います。

弘末：ありがとうございました。坂井先生、本日の台湾のお話ではいろんな陶磁器を受容しているわけですけれども、それによって台湾の文化社会にどういう影響を与えたのか、ご意見いただけますでしょうか。

坂井：影響をもっとも与えたとするなら、今でも住んでいる原住民の人たちの生活に影響を与えたということが確実に言えると思います。今日私が紹介したのはカバラン人ですが、この人たちに限らず他の人たちも、基本的に自分たちの焼き物は土器しか持っていませんでした。それより高い技術の焼き物の生産はまったくありませんでしたが、意外に輸入陶磁器を多く使っています。

よく知られた例としては、シラヤ人など水を拝むということをしている人たちがいます。この人たちの拝む対象は液体の水ですが、水だけの保管はできないですから、それを入れる容器がとにかく必要になります**（図３）**。何でも良いから容器ということで、当然のように陶磁器の壷の中に入れた水を拝みます。横から見ていると壺を拝むというように見えます。

図３　シラヤ人の現代の祭壇／坂井撮影

それとは別に、先ほどのルソン壺との関係で考えた場合、まずルソン壺というものを考

古学的に特定するのが非常に難しいと言えます。何がそうなのかという定義を考えると、それは茶葉を長期間保存するのに適当な器、入れ物であることになります。そのような茶壺の場合、湿気が入りにくいことが前提であるし、あまり口が大きくないものとなりますが、かなりのものがそれに当てはまります。

図４　モン窯黒釉白彩大壺／坂井撮影

そのような一つで必ずしも茶には使ってないですが、今日紹介しましたタイのシンブリ窯の大きな壺は、カバラン人の遺跡では発掘で出てきています。それとは別に西海岸の最南部にパイワン人たちがいますが、この人たちに伝世されたものが日本統治時代に報告されています。実物は恐らく同じ16世紀ぐらいのもので、それが長く3世紀以上伝世されて使われていたことになります。パイワン人たちは茶を飲んだり作ったりしてないですが、やはり今おっしゃられた威信財になっています。パイワンは貴族社会なので、貴族階級の上の地位の人たちが持っていたということです。そのような威信財としての使用というのは、何をそれとするかという問題はありますが、かなり普遍的であることは確かです。

あと同じようなもので、今日、伊川さんが最初の定義のところでおっしゃられた陶磁器で、一般にマルタバンと呼ばれるものがあります。これは非常に広い定義のもので、大きな壺全体を含むことがあります。それをもう少し絞ると、名前になっているマルタバンというのはミャンマー南部の現在はモッタマと呼ばれる港です。ここから輸出された大きな壺が最初にそう呼ばれて、記録で最も古いのはイブン・バトゥータのものです。残念ながら彼が記録したものが実際に何であったのかは、考古学的にははっきりしません。

しかしここから輸出された大きな壺の15世紀後半段階のものは確認できます。これは高さ60～70cmぐらいある大きな壺で、黒い薬がかけられています（**図４**）。これがマルタバンの港の後背地にいるモン人たちによって生産されたことはまず間違いがないのですが、おそらく最初の用途としてはインド洋での貿易航海で飲料水の容器として使われたと考えられます。

ところがこのような大きさの壺は中国でも全く作られていなく、モン産の大壺は17世紀頃になると1mぐらいの大きさになります。それは航海が終わって飲料水がなくなった後でも転用され続けていき、今日私が発表しました安平壺どころではない、インド洋世界ほぼ全域から東アジア世界まで非常に広範囲に流通します。西側はイスタンブールのトプカプ宮殿にいくつもあり、そしてスワヒリ世界の南の方までもたらされています。東南アジアはもちろんどこでもあり、さらに有名な出土例は豊後府内の大分です。大分の大友氏時代の豊後府内の調査で土に埋められたままの状態で10個の大壺が発見されましたが、そのうちの一つが狭い意味でのマルタバンと呼ばれる壺でした。

その流通最盛期は16～17世紀ですが、少し感じが違うものは現在でも作っています。かなり広範囲にアジアの海域世界ほとんど全域に分布していたことは間違いないです。それが私の住んでいる台湾には、今までのところ報告例がないです。本当に来なかったのか、あるいはまだ未確認なのかという問題もありますが、そのようなネットワークは非常に広いので、恐らくそれほど遠くない将来に発見されるのではないかと思います。これは狭い意味でのルソン壷とは違い、容器として恐らく茶葉の保存には適さないとは思います。しかしこの動きも非常に面白いと感じています。

弘末：ありがとうございました。広域に受容された大壺がマルタバンと呼ばれたというこ

とですね。

それでは時間になりました。最後に金沢先生、受容した方ではなくて出す、生産した方から、景徳鎮であれ、それ以外のところであれ、人々が込めた思いについてお話しいただけませんでしょうか。

金沢：ぴったりのことが言えるかどうか分からないんですけれども、ちょっと今、お話伺っていて、茶の湯のことなんかも出てきていますと、この海域の向こうとこっちで情報を伝達しないと入手できない製品があります。例えばよく景徳鎮の明末の焼き物の中には、これは全部じゃないと思いますが、日本のデザイン（**図５**）とか、日本の好みが完全に入ったもの、中国じゃつくり得ないようなもの、アイデアが出てこないようなものもありますし、「天文年造」の年号の入った景徳鎮の焼き物が、日本の遺跡でも景徳鎮の窯跡（**図６**）でも見つかって、話題になっています。

また茶入につきましては、茶入のようなものがフィリピンにごろごろあるんですね（**図７**）。ところが、それは福建省の内陸、南平県の茶垟窯で焼かれていたことが分かって、でもその中の、さっきのルソン壺のときにも形のよろしいものが選ばれるということ

図５　古染付御所車文手付鉢　明時代末期　景徳鎮窯／出光美術館蔵

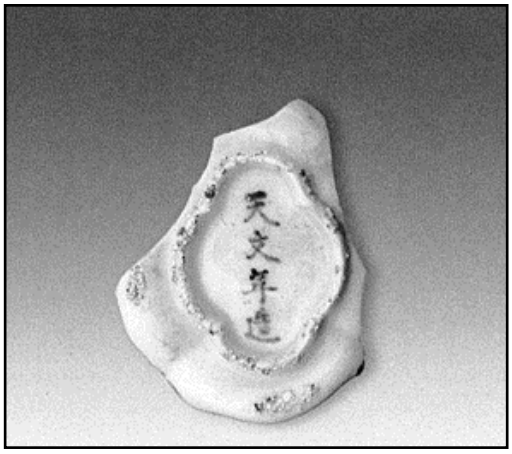

図６　景徳鎮観音閣窯址出土の「天文年造」銘青花小皿

『文物』2009-12より

図７　フィリピン出土の褐釉小壺／出光美術館蔵

がありましたけれども、それで選ばれたものが日本に来て（**図８**）、今重要文化財にまでなっているものもある。

そのように、どれほどか分からないんですけれども、単に物資が船に積まれていたから引き取ったとか、運ばれて来たっていうことだけじゃなしに、なにがしかの情報があって、それを介在する人がいて、取り結ばれた需給関係のようなものも考慮されていいんじゃないかという気がしておりました。

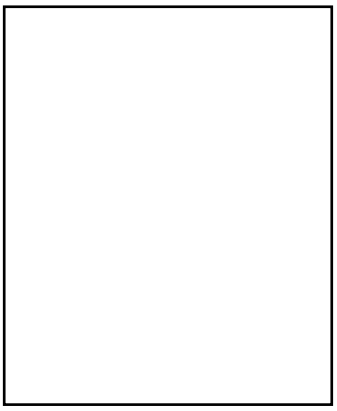

図８　肩付茶入 銘 師匠坊
明時代／出光美術館蔵

これはちょっとすごい飛躍で、そんなこと言っちゃいけないと言われるかもしれませんけれども、今日的な問題の、ここまでがうちの領分とか、ここはうちのもともとの所有権だとかいうことを言い争っている国々がありますけれども、海域的世界っていう、それぞれの周辺の国のものじゃない、海域の人々の取り結んだ世界だと言えるものが、一時期にでも存在したんであれば、これがいろんなものを解決する知恵になるのではないかという、ちょっと夢物語も描かないではないほどに、当時、その海域を取り結ぶ人たちが情報までも伝達して、商品を動かし、人が動いていたのではないか。あるいは場合によっては秩序を保つような組織を持っていたのではないか、というような印象をやや深めつつあるというところでございます。

弘末：ありがとうございました。ある意味でこのシンポジウムを締めくくっていただくコメントを頂きました。

どうも今日は長時間にわたりまして、本当にありがとうございました。5人のご先生方、ありがとうございました。また機会があれば、ぜひこの続きのシンポジウムを持たせていただきたいと思います。

上田：どうもありがとうございました。非常にエキサイティングな議論でした。一つの陶磁を通じて、東シナ海域、南シナ海域が非常に濃密につながっていることが手に取るように分かると同時に、いろいろな謎が残されたという感じもします。

今回のシンポジウムは、アジア地域研究所主催で「21世紀海域学の創成」というプロジェクトの一環であります。そのプロジェクト自身は今年度終わりますけれども、今日の議論というのをぜひ今後引き続いて、いろいろな形で展開、具体化していければと思います。最後まで残っていただき、どうもありがとうございます。今日はこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。